

研究ノート

## 質的調査方法を用いたソーシャルワーク研究に関する一考察

Studies in the problem of Qualitative Methodology for Social Work.

高木 健志 (山口県立大学社会福祉学部)

Takeshi TAKAKI

### はじめに

ソーシャルワーカーは、ソーシャルワーク実践(以下、実践とする)において、利用者との対話を通して、利用者とともに、その問題や問題の所在を探る。そして、利用者自身が持つ問題解決のための力を引き出せるようにかかわったり、また必要に応じて社会資源を活用するなど利用者の環境に働きかけていくことによって、その問題の軽減や解決を図る。

その際、ソーシャルワーカーは、個別性の原則の視点から、ひとり一人の利用者の存在を尊重する。利用者の抱える問題や状況は、個々別々であるというところが出発点となる。これを、しばしば、現場の実践家の言葉を借りれば、ケースバイケース、と表現される。しかし、これらケースバイケースといわれる各々の事例には、“共通した何か”があったり、類似した事例やそれらとは対極にある事例などの諸々の経験が実践家の中に蓄積されていく。その“経験される何か”を、「実践経験自体を概念系の中で対象化・言語化し、何らかの意味で測定して意図・経過・結果を示」すことがソーシャルワーク研究(以下、研究とする)の果たす大きな一つの意義といえるだろう(高橋2002: 4)。

ソーシャルワーク実践の現場で、ソーシャルワーカーに解決や軽減が求められてくる状況や課題は、人と人、また人と環境とのあり方が複雑に絡み合っている。

実践を対象とする研究に取り組むにあたっては、このような複雑な現象に関心をもち、研究テ

マとして取り上げていくこととなろう。特に、まだ先行研究が十分ではない場面などを研究テーマとして取り上げる場合には、質的研究を選択されることが多い。

質的研究方法におけるデータの収集方法として、たとえばインタビューを用いるなどといった点で、実践と特に質的研究方法とは、共通している部分が一見多く見当たる。そのため、筆者の関心は質的研究に向いていった。しかし、実際に質的研究方法を用いた研究の理解をすすめていくなかで、方法の理解とともに質的研究方法に関する事前の理解が非常に重要になるということを感じた。

そこで、本稿では、ソーシャルワークの「実践」と「研究」とのあり方について検討し、そして、ソーシャルワーク研究における研究パラダイムの類型とソーシャルワークにおける主な研究方法について概観したうえで、研究パラダイムと質的研究方法との関係について、筆者の現時点での関心を引き合いに出しながら検討していった。

### I. ソーシャルワークの「実践」と「研究」について

人と人、人と環境との関係を主な対象としたソーシャルワークにおいて、実践と、それを対象とした研究とは、どのようなあり方であることが望ましいのだろうか。

研究の分野においては、これまで、科学的であるという場合には、「近代科学が17世紀の科学革命後に手に入れた<普遍性><論理性><客観

性>によって現実や実践を機械論的・力学的に説明し説得してきたこと」(中村 2002: 1)が求められてきた。しかし、その結果、「理論が実践と乖離することを余儀なくしてしまった」(中村 2002: 1)。

中村(2004)は「一般にこれまでの科学は、自然科学ばかりでなく経済学・心理学も現実の複雑な状況をできる限り単純化、理想化してとらえようとしてきた。一方、複雑系の科学では、現実の複雑な現象をまさに複雑なものとしてとらえようとする。こうした動きは、ソーシャルワークにも当てはまるであろう」とした上で、「この結果、多様な研究方法の開発や検証・実証を踏まえ課題解決を模索すべきものであることを知らしめた」ことを指摘している(中村 2004: 1)。佐藤(2002b)は、「いわゆるパラダイムの変革によって、客観性を強く志向してきた従来のあり方に根底からの問いかけがなされるようになってきた。」とした上で、「これまでのモダン・パラダイムが支配的であった時代には、研究方法と結果の客観性が求められてきた。しかし、パラダイムの変革によって、ポスト・モダンパラダイムが台頭してきたことによって、相対的に軽んじられてきた「主観」を大事にするという考え方であり、個別性の中に独自性といくつかの普遍性を見出そうとする質的研究方法が広がっていった。」と整理している(佐藤 2002b: 91)。

このため、質的研究には、先の「実践と理論の乖離」を乗り越えた、これからの実践と理論化とのあり方の発展的可能性が期待される。

また、ソーシャルワーク研究方法としての、数量的研究と質的研究における関係は、もはや数量的・質的のどちらの研究方法が優れているのか、という議論ではない(高橋 2002: 山崎 2009)。研究テーマに応じて、方法が選択されるということである。

J.Lofland & L.Lofland (1995=1997) は、フィールド研究における3つの課題の互いの関係をあらわすひとつのイメージとして、「橋を架けようとしている河川の両側にある防波堤」(J.Lofland

& L.Lofland 1995=1997: 2) というイメージを示している。

ソーシャルワークにおける実践と研究との望ましいあり方を、J.Lofland & L.Loflandのイメージを借用しながら示すことを試みれば、堤防の一方が「実践」であり、堤防のもう一方が「研究」となる。このイメージからすれば、ソーシャルワークは、実践と研究との「架橋する営為」(J.Lofland & L.Lofland 1995=1997: 2)の結果としてある、ということであろう。つまり、ソーシャルワークにおける実践と研究は、その両者どちらも、ソーシャルワークにとって不可欠といえるのである。ただ、中村(2002: 1)の指摘にあるように、実践と研究とに乖離が起こっていたということもある。しかし、実践との間で起こった乖離を、多くの研究者たちは、課題視し、状況を乗り越えようとしてきた。その結果、今日においては、従来の科学的とされてきた方法のみならず、実にさまざまな研究方法が開発され、実践に活かされる研究の方法が試みられている。

## II. ソーシャルワーク研究における研究パラダイム

ソーシャルワーク研究は、複雑多岐の要因によって目の前で起こっているある事象を、どのようなモノの見方に立って捉えようとしているのか、ということから臨むことが重要となるのではないだろうか。三毛・池埜(2003: 126)は、調査の方法論のみならず、その背景にある実在論や認識論への理解に立ったうえでの方法論の選択の重要性を指摘している。

では、現時点での、ソーシャルワーク研究における研究パラダイムにはどのような状況になっているのであろうか。

わが国のソーシャルワーク研究パラダイムについての研究は、Guba&Lincolnの研究パラダイムを援用した先行研究がある(岡 2003: 三毛・池埜 2003)。そこで、本稿においては、この先行研究における研究パラダイムを、ソーシャルワーク研究における研究パラダイム類型として以後の検

討をすすめてくこととする。

さて、この研究パラダイムによると、質的調査やソーシャルワーク研究においては、次の大きく4つの研究パラダイムに類型される。

すなわち、①調査する側の視点と独立して「客観性」が存在するため、研究者は「客観的」事実を発見しなければならないとする「実証主義 (positivism)」、②人間には現実 (reality) を完全には理解できないことを認めつつも、厳格なデータ収集法と分析法で研究者は真実に近づけるとす

る「ポスト実証主義 (post positivism)」、③現実の把握は、歴史的、政治的、社会的、民族的、そして性的な条件によって左右される研究者の偏り (バイアス) に影響されるとする「批判理論 (critical theory)」、④現実を変数などの部分に分けて研究できるものではなく、全体的に、しかも文脈のなかでのみ研究することができるとする「構成主義 (constructivism)」である (岡 2003 : 117-119)。

それぞれの類型と構成要素については、表に示した (表1)。

表1 研究パラダイムの構成要素と類型

	研究パラダイムの類型			
	実証主義 (positivism)	ポスト実証主義 (postpositivism)	批判理論ほか (critical theory)	構成主義 (constructivism)
現実に対するもの見方 (实在論)	絶対的な現実の存在を容認。	絶対的現実が存在しているが、それは不完全な形で理解される。	現実の存在は容認されるが、社会的・政治的・文化的・民族的・ジェンダーの力によって集積され、リアルな構造として形成される。	現実をとらえることができるが、それは多様であり、人間の精神活動によって生み出される。
調査者・調査対象との関係 (認識論)	調査者と調査対象とは独立しており、調査者の客観的ポジションを容認し前提とする。	調査者と調査対象との独立は維持不可能として放棄するが、調査者の客観的ポジションをできるだけ追求する。	調査者と調査対象は相互作用する。調査者の価値 (value) が調査に影響する。	絶対的客観の否定。現実とは、調査者と調査対象との相互作用によって形成される。
知識を出す方法 (方法論)	実験と操作化、仮説の検証、量的調査法が中心。	厳密性を緩和した実験・操作化。仮説を反証するために多次元的方法の採用。質的調査法も含まれる。	調査者と調査対象の対話 (dialogue) による。対話は、人々が知らなかったり、誤解していることについて、知識を増やしより意識化するために、弁証法的でなければならない。	解釈学的。調査者と調査対象間の相互作用を通じて、知識を構築する。
補足説明	自然科学と社会科学において、過去400年近くにわたって支配的であったパラダイム。	基礎をなす考え方は実証主義と同じ枠内に留まっているが、実証主義のもっとも批判された部分に応える形で形成されたパラダイム。	ここでの批判理論とは、①ネオ・マルクス主義、②フェミニズム、③唯物主義、④直接参加調査の4つをGuba&Lincolnが独自に構成し命名したものである。あるいは、①ポストモダニズム、②ポスト構成主義、③①・②の融合としても、捉えることができる」と説明されている。	ポストモダニズムの影響を受けている。

(三毛・池埜 2003 : 125より筆者引用改変)

三毛・池埜（2003）は、「ソーシャルワーク調査研究が実践を改良するためにいかされていない状況に危惧」を示したうえで、「単にデータ分析法や収集法といった調査方法論だけではなく、実在論や認識論などから構成される研究パラダイムの全体を視野に入れて、調査研究の意義とあり方を検討していく必要がある」ということを指摘している（三毛・池埜 2003：126）。

それぞれの研究パラダイムには、特徴があるため、研究を計画して行くにあたっては、自らがどのような見方によるか、ということについての理解と自覚が重要となってこよう。

従来からの自然科学における認識は、長く客観的事実の発見に関心が向けられた実証主義に基づくものであった。このため、自然科学に多大な影響を受けながら発展してきた社会科学における研究でも、研究する個人の主観を抑え、客観性を保つ研究に基づいた知見が科学的であると広く認識されてきた。

しかしながら、人と人のかかわりあいであるソーシャルワーク実践を対象とした研究においては、どうしても“数値では表すことのできない何か”が存在することが経験されてきた。そこで、客観性を保つことによって成り立つ研究パラダイムとともに、主観性を保つことによって成り立たせていく研究パラダイムの重要性についても多くの議論がなされてきた。その結果、ソーシャルワーク実践を対象とした研究では、多様なパラダイムが認められている。社会科学のなかでも、特に、ソーシャルワークや看護領域では、実証主義に限らない研究パラダイムに基づいた認識を背景とした研究の手法へと関心が広がることとなった。

さらに、調査研究を行うとは、「実在論・認識論・方法論の3つが踏まえらるること、そして各研究パラダイム類型の実在論・認識論・方法論の3つともがマッチするように、調査が設計・実施されなければならない」（三毛・池埜 2003：126）、と指摘されている（図1）。

このように、方法論の持つ背景への理解があれば、より、研究テーマに沿った研究方法の選択が

可能となるのである。

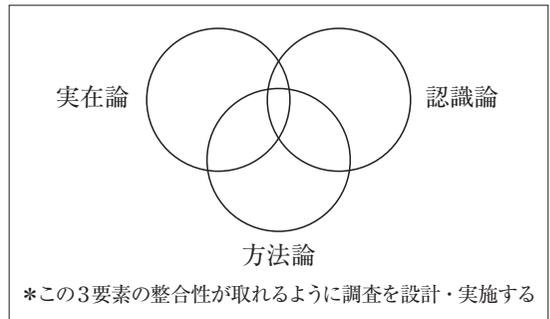


図1 研究パラダイムの整合性

（三毛・池埜 2003：126より筆者引用改変）

### Ⅲ. ソーシャルワークにおける主な研究方法について

今日のソーシャルワーク研究法として、その具体的な研究方法には、量的研究と質的研究がある（高間 2003：藤井2004）。しかし、筆者は、現在のソーシャルワーク研究の方法が、量的研究と質的研究とに二分されているということを示したいのではない。本稿では、研究パラダイムと研究の方法とのそれぞれの密接な連関性について提示していくために、本稿では、便宜上、数量的研究と質的研究があるということを暫定的な前提とした。

さて、量的研究は、「一定の手続きに則り、問題を理論的に理解し、それを測定可能なものに操作化し結果を数値で表すことにより、科学的、客観的に問題や効果を説明することができる」（藤井 2004:31）。つまり、「理論から仮説を立て、データの分析の結果から仮説を立証する」（呉 2003：170）。

また、質的研究は、「量的調査ではとらえられない実態を把握する」（藤井 2004：32）ことが可能となる。つまり、「研究者がデータの収集・分析と理論の検証の間を自由に行き来しながら結論に到達することが可能となる」（呉 2003：170）。

このように、量的研究と質的研究には、さまざまな相違点があり、その相違点を理解していくこ

表2 質的研究と量的研究の比較

	質的研究	量的研究
目的	理解する、データから理論を生成する	仮説、予測、コントロールの検証
アプローチ	幅広い焦点 プロセス志向 文脈に縛られる、多くは自然な場でなされる。 データに忠実である。	狭い焦点 結果志向 文脈に左右されない。意図的な場でなされる。
対象	調査参加者、情報提供者 場、時、概念のような構成単位を選択 流動的な選択	回答者、対象 研究開始前に標本抽出枠の決定
データ収集	徹底的な非標準化面接 参加観察/フィールドワーク 記録物、写真、ビデオなど	質問紙、標準化面接 厳密な構造化観察 文書、無作為対照実験
分析	潜在的な内容分析 グラウンデッドセオリー 民俗学的分析など	統計的な分析
結果	物語、民族誌、理論	測定可能な結果
関係性	研究者が参加者に深くかかわる	研究者のかかわりは限定される

(呉 2003 : 174より筆者引用改変)

とで、それぞれの研究テーマに最適な研究の方法の選択を行っていくことができるのではないだろうか(表2)。

### Ⅲ-1. 数量的研究の方法について

数量的研究は、文字とおり、数量的なデータを収集し、分析を行うことで、実証していくこととなる。数値を用いて実証していくことによって、情報を簡潔にまとめられ、現象の一般的な法則を把握できる「要約性」、数値による分析や記述によって、客観的かつ性格に現象を説明できる「客観性」、情報を統計処理によって分析でき、事象の因果関係を合理的に示し、なぜ起こるかという過程を知ることができる「合理性」、一般的な法則における確率を検証し、予測を立てることができる「予測性」といった4つの特性がある(日下 2003 : 89-90)。その事象が「なぜ」起こるのかという因果関係と、事象が「どのようにして」起こるのかという過程を明らかにできる。実践現場においては、アンケートを用いた調査などが、よく知られた数量的研究の方法であろう。近年では、パソコン等の発展によって、統計処理がより身近になったとはいえ、研究においては、高度な知識や技術を要する(表3)。

### Ⅲ-2. 質的研究の方法について

それでは、以下、質的研究の主な方法について触れていくこととしたい。

数量的研究方法と、質的研究方法とのもっとも大きな違いは、「質的研究方法は、量的研究方法とは相対的に異なる方法を試行・採用することになる」(佐藤 2002b : 91)という点であろう。

質的研究方法には、エスノグラフィー、口述史研究、グラウンデッド・セオリー、ケーススタディなどがある。

エスノグラフィー(民族誌)は、「あるフィールドの文化に関する記録、およびそこから生まれた研究知見という意味がある。局所的な場所、特定の領域において共有されている価値規範や行動様式という意味で「民族」という言葉が用いられている」(田垣 2009 : 105)。

口述史研究は、「今まで語られてこなかったこと、語られてはきたが病理学的見地からのみであったこと、部分的にしか語られてこなかったことに関する知識基盤のギャップをうめるために利用できる」(佐藤 2002 : 35)、という特徴を持つ。

グラウンデッド・セオリーは、「調査者が収集したデータを解釈し独自にカテゴリー、すなわち概念を生成することによって現象を表現する」(三

毛2002：18) ことができる。

ケース・スタディーは、「一事例ないしは少数例を個別に深く検討し、その状況や原因、対策を明らかにする」(山川 2004：272)。

このように、質的調査法といっても、様々な方法があることから、それぞれの調査研究の目的に沿った質的調査方法の選択が必要となってくるであろう(表4)。

表3 データの処理方法

分析	データの種類	変数の数	
		1変数	2変数
記述統計	名義・順序尺度	度数分布 最頻値	クロス表
	間隔・比率尺度	ヒストグラム 中央値・範囲 平均・標準偏差 散布図	
検定	名義・順序尺度	$\chi^2$ 検定	
	間隔・比率尺度		t検定(ただしグループ変数は質的データ) 分散分析(ただし従属変数は質的データ) 積率相関係数・順位相関係数回帰分析
多変量解析	名義尺度	林の数量化Ⅱ類 林の数量化Ⅲ類	
	間隔・比率尺度	重回帰分析(従属変数は質的データでも可) パス解析 林の数量化Ⅰ類 因子分析・主成分分析 クラスター分析(質的データでも適用可) 共分散構造分析 分散共分散分析 判別分析(従属変数は質的データ)	

(日下 2003：110より筆者引用改変)

表4 主な質的調査方法の特徴

	特徴
エスノグラフィー(民族誌)	あるフィールドの文化に関する記録、およびそこから生まれた研究知見という意味がある。局所的な場所、特定の領域において共有されている価値規範や行動様式という意味で「民族」という言葉が用いられている。
口述史研究	今まで語られてこなかったこと、語られてはきたが病理学的見地からのみであったこと、部分的にしか語られてこなかったことに関する知識基盤のギャップをうめるために利用できる。
グラウンデッド・セオリー	調査者が収集したデータを解釈し独自にカテゴリー、すなわち概念を生成することによって現象を表現する。
ケース・スタディー	一事例ないしは少数例を個別に深く検討し、その状況や原因、対策を明らかにする。

出典：田垣(2009) 佐藤(2002) 三毛(2002) 山川(2004)より筆者作成

#### IV. 研究パラダイムと実践を研究する質的研究方法との関係について—シンボリック相互作用論を例に取り上げる—

人と人とのかかわりあいのなかで、どのようなことが、どのような文脈のなかで行われているのか、といったことを研究のテーマにした場合には、質的研究が選択されていくこととなる。

たとえば、精神科病院に勤務している精神保健福祉士の方に調査協力を得ながら、退院援助をテーマにインタビュー調査を行うとすると、退院援助をすすめる前に、病院という医療職種が多数を占める組織のなかでどのようにして精神保健福祉士が自分たちの立場を確保し、チームとしてのアプローチへと展開していくのか、とか、社会資源を利用者に紹介する際に、より紹介しやすくするためにどのような創意工夫を重ねているのか、といったことを明らかにすることができよう。

たとえば、精神保健福祉士が、利用者に社会資源を紹介する場面を取り上げて考えてみよう。

利用者の社会資源について知りたいという相談を受けるなどして、精神保健福祉士は、社会資源の紹介という目的をもってその利用者とのかかわりあいを始めていくこととなる。

ここで、精神保健福祉士の側に視点をおいてこの場面を見ていくと、利用者が社会資源を理解しやすいようにどのように工夫するのかというところができよう。面接室で行う面接の場面において、施設のパンフレットを提示しながら、口頭で利用者に説明をすることで、社会資源の紹介としているのだろうか。それとも、利用者にとってどのような方法で社会資源を紹介していくことを可能とするために、もっと他の方法を考えて、用いているのだろうか。では、そのために、精神保健福祉士は、実践において、利用者の意見や希望を尊重しながら、利用者に社会資源の情報がより伝わるように、どのようにして工夫を重ねていくのだろうか。

このように、視点を定めて場面を見つめていくと、精神保健福祉士と利用者とのあいだには、相互に対話という行為を繰り返しながら、ものごと

が進んでいくということをとらえ、説明することができるようになる。

行為の主体者としての精神保健福祉士と利用者が、相互に行為をやりとりしていくことに注目し、そのやりとりを説明していこうとするのが相互作用論である。精神保健福祉士と利用者とのあいだには、互いに影響し合う関係があり、社会資源の紹介とは、精神保健福祉士と利用者とのいわば共同作業であるにとらえ直していくことが可能となる。この相互作用論には、シンボリック相互作用論やドラマツルギー、交換理論があるが、このうち、1937年にH・Blumerによって最初に用いられたのが、シンボリック相互作用論である(Herbert Blumer 1969=後藤 1991:76)。

シンボリック相互作用論の基本的視点として、「人間の行為や相互作用が単なる物理的な刺激—反応として生じるものとは考えない『意味』の重視、人びとの社会生活を一連の相互作用からなる社会過程として捉えようとする社会過程の重視」(宝月1990:84-86)をすることから、ソーシャルワークにおけるソーシャルワーカーと利用者間においておこることがらを捉え、説明していく理論としてソーシャルワークの実践を研究していく上では重視することができる。

シンボリック相互作用論は、「個人であれ、集合体であれ、それらの社会生活のリアルな姿を分析し、かつそのダイナミックな姿に接近しようとすることに適したアプローチであるといえ、洗練された概念枠組みにあわせて現実の多様な人間の社会生活を裁断したり、理論をただ鑑賞するようなことは、このアプローチの本来意図するところではなく、こうした相互適応のメカニズムをたんに解明することに満足するのではなくて、そうしたメカニズムが具体的な社会生活の場面で実際にどのように活動しているのかに関心を持つ」(宝月 1990:108)という特徴をもっている。

筆者は、現在、実際の退院援助の場面で精神保健福祉士がどのように活動しているのかということに関心をもっている。精神保健福祉士が行う退院援助の過程を分析し、創意工夫を重ねながら退

院援助を展開する精神保健福祉士の現実の多様な姿に接近していきたいと考えている。そう考えるならば、シンボリック相互作用論についての理解が重要となる。

研究に取り組む人にとって、どのような視点からその事象に接近していくのか、という認識を明らかにしていくことで、研究を進めていくにあたって必要とされる方法が計画されていくことになる。この過程を経ていくことで、それぞれの関心から萌芽した研究の芽が、次第に、現実的な研究計画へと研究に取り組む人によって育まれていくこととなる。たとえば、先の例でいえば、これまで、しばしば「経験や勘」として表現されるなどしていたものが、少しでも、その実態が解明されることによって、これまでは漠然と理解されていた営為の一つ一つが、ソーシャルワークの技術としてとらえられ、そしてソーシャルワークの発展に貢献していくという意義を持つこととなっていくのではないだろうか。

## おわりに

ソーシャルワークの実践は、主体性を持ったソーシャルワーカーと、主体性をもった利用者と、そしてそれらを取り巻く環境とのあいだにおいて営まれていく。筆者は、ソーシャルワーカーとしてその実践現場に身を置いていた者として、臨場感を持った研究アプローチによってその現場に接近していきたいと考える。ソーシャルワークを必要とする実践現場は、さまざまな状況や要因が複雑に絡みながら、しかも個々別々の特性を持ちながら、現実的な課題や問題としてわれわれの目の前にあらわれてくる。そのように、複雑多岐だからこそ、ソーシャルワーク実践は創意工夫にあふれたものとなっていく。このようなソーシャルワーク実践を対象にしたソーシャルワーク研究だからこそ、多様な視点や接近のための方法、さらに多様な価値や方法を認め合うことが必要となるのである（藤井 2004、三毛・池埜 2003）。質的研究には、先の「実践と理論の乖離」を乗り越えた、これからの実践と理論化とのあり方の発展的

可能性が期待される。今後は、本稿では触れることのできなかつた部分も含めて、さらに検討を行っていくことを筆者の課題として考えたい。

ソーシャルワーク研究の方法やパラダイムについて整理していくということは、まだまだ未熟な筆者にとっては、力量を超え果敢に挑んだというものであった。しかし、そのような貴重な機会が今筆者に与えられているのも、未熟者の挑戦を温かく見守っていただいている諸先生方のおかげである。

これからも、変わらず、何よりも、実践現場における日々のソーシャルワークの営為への畏敬の念と誠実さをもつて、教育・研究活動に精励していくこととする。

## 引用文献

- 藤井美和 (2004) 「ヒューマンサービス領域におけるソーシャルワーク研究法」『ソーシャルワーク研究』29 (4)、28-35。
- Herbert Blumer (1969) *Symbolic Interactionism*, Prentice-Hall, Inc. (=1991 後藤將之訳『シンボリック相互作用論—パースペクティヴと方法—』勁草書房。)
- 宝月誠 (1984) 「シンボリック相互作用論」『社会学のあゆみ パートII 新しい社会学の展開』、83-108、有斐閣新書。
- J. Lofland & L. Lofland (1995) *Analyzing Social Setting*, International Thomson Publishing, Inc. (=1997 進藤雄三・宝月誠訳『社会状況の分析—質的観察と分析の方法—』恒星社厚生閣。)
- 日下菜穂子 (2003) 「量的研究の方法」久田則夫編『社会福祉の研究入門』、中央法規。
- 三毛美予子・池埜聡 (2003) 「日本における「実践理論」構築を目的としたソーシャルワーク研究法の課題」『関西学院大学社会学部紀要』95、123-131。
- 中村佐織 (2002) 「巻頭言『ソーシャルワーカー』をブランドに」『ソーシャルワーク研究』27 (4)、1。
- 中村佐織 (2004) 「巻頭言『ソーシャルワークの

研究方法を考える時』、『ソーシャルワーク研究』  
29 (4)、1。

呉裁喜 (2003) 「第9章 質的調査法」平山尚・武  
田丈・呉裁喜ほか著『ソーシャルワーカーのた  
めの社会福祉調査法』、168-202、ミネルヴァ  
書房。

佐藤豊道 (2002a) 「口述の生活史研究」『ソシヤ  
ルワーク研究』27 (4)、35-40。

佐藤豊道 (2002b) 「編集後記」『ソシヤルワー  
ク研究』27 (4)、349。

田垣正晋 (2009) 「質的調査の方法」『新・社会福  
祉士養成講座5 社会調査の基礎』、86-128、  
中央法規。

高橋信行 (2002) 「量的研究方法と質的研究方法  
の対立と和解」『ソーシャルワーク研究』27 (4)、  
4-12。

高間 満 (2004) 「第4章研究計画の立て方・進め  
方」『社会福祉の研究入門』、49-65、中央法規。

山川透 (2004) 「事例検討」『精神保健福祉用語辞  
典』272、中央法規。

山崎美貴子 (2009) 「巻頭言『科学的研究の行方』」  
『ソーシャルワーク研究』35 (2)、1。

## Studies in the problem of Qualitative Methodology for Social Work.

Takeshi TAKAKI

In this text, the ideal way of “Practice” of social work and “Research” was examined, and it took a general view of the main research method in a pattern and social work of the research paradigm in the social work research. The concern at author’s present was examined about the relation between the Research Paradigm and the method of a Qualitative Research on that while mentioning the example.